
まくらぶ

大野はるたか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まくらぶ

【Nコード】

N6265D

【作者名】

大野はるたか

【あらすじ】

枕が大流行している時代。ひとつのレンガを巡って、四人の人間の人生が交わる。

承前

承前

人間には三大欲求というものがある。食欲、性欲、睡眠欲だ。人間はいつの世もこれらの欲望に振り回されながら生きてきた。

二十一世紀初頭。人間の欲望はとどまることなく加速していた。

地球上のあらゆる食物は出回り、見知らぬものを食す機会は消え去った。

地球上のあらゆる性行為は成熟し、どんな奇異なプレイすらすでに先人たちの手垢のついたものに成り下がった。

人間の欲望は加速する。

新たな欲望を満たすため、世界の学問はひとつの分野に集中し始めた。

睡眠欲。ひいては、それを味わいつくすための多種多様なアイテム。

睡眠学は細かく分化し、様々な方面から新たな睡眠の在り方を発掘していった。

やがてある学者が真理に到達する。

よりよい睡眠に何が必要なのか。その答えにたどり着いたのだ。枕である。

彼の偉大な研究は世間を枕一色に染め上げた。

枕についての様々な考察や論証がなされ、人間が本来求めるべきものは金でも愛でもなく、枕だという今まで誰にも到達し得なかった真理が世界を満たした。

人々の暮らしにはいつも枕があった。多くの企業が新たな枕を考案し、様々な分野に枕は浸透していった。テレビを点ければ、枕専門番組がゴールデンタイムで放映されているのが当たり前になった。大枕時代。

後の世の人間がそう呼びあわす新時代の幕開けである。

1・茂木敏彦

ぼくはひたすら眠かった。

最近、眠りが浅い。一日に二時間も眠れればいいほうだ。

視界が霞んでいる。地面を踏んでいる感触がない。

原因は分かっている。

枕だ。

電車を乗り継いで三時間。今日は都会の枕専門店にまで足を運んだが、自分に快眠を提供するような枕は見つからなかった。

今日もまた、寝心地の悪い枕で夜を明かすことになるのだろう。

憂鬱だ。

疲れがたまる一方で、一向に癒されることがない。

最近の枕業界はだめだ。大衆に媚びてしまい、無難な性質のものしか生産しなくなっている。ぼくの好みである、後頭部を適度に支えてくれる固めの枕なんて作る気がしないのだろう。

その時、足に何かがぶつかった。

堅い。重い。

レンガだった。ぼくの靴よりも一回りほど大きい、赤茶けたレンガだった。

ぼくは惹きつけられるように道の上に屈みこんだ。周囲に人通りはなく、この道を通る車も一日に数えるほどしかない。誰かの邪魔になることはないはずだった。

まるで柔肌で優しく撫でられているかのように、甘い吐息が吹きかけられているかのように、くすぐったいような、恥ずかしいような、不思議な感覚がぼくの後頭部を襲った。

気付けば、ぼくは地面に横になって、レンガにそつと頭を載せていた。

その瞬間、ぼくの全身に電流が走った。

ぼやけていた景色が、強烈な勢いではっきりとしてきた。遠のい

ていた五感が急速に蘇ってきた。

これだ。このレンガだ。

胸の奥から甘酸っぱい鼓動が鳴り響く。色を増した世界がぼくを輝かしく祝福している。

さまざまな枕を試した。ペットボトルや広辞苑　枕以外のものも試した。しかし頭を何に載せても、ぼくの心は休まらなかった。ぼくを癒してくれるものはなかった。

やっと出会えた。

このレンガこそ、ぼくに相応しい　ぼくだけの、枕なんだ。ぼくはありあまるほどの喜びを胸に、いつの間にか意識を失っていた。

夢を見ないほどの、深い眠りだった。
冬空に、静かな風が吹きぬけていった。

2・柴田健二

また駄目だった。

俺は今日の面接で手応えをほとんど感じなかったことから、ヤケ酒をひとりであおっていた。

これで二十社目。このままでは就職浪人だ。

呑まなきゃやってられなかった。

深夜。唐突に電話が鳴った。

「おい、ケン。すごい発見だ！」

大学で同じゼミの敏彦だ。やたらと興奮している。

「いまからお前の家に行く」

それだけ言つて、唐突に電話を切られた。

こちらの都合も考えずに勝手な奴だ。

やがてウチにやってきた敏彦は俺の嫌味も受け流し、持ってきた紙袋を突きつけてきた。

仕方なしに中身を覗いてみると、レンガがひとつだけ入っていた。

意味が分からない。

「なんだこれ？」

「新しい枕だよ」

敏彦はまくしたてるようにこのレンガの枕としての可能性を語り出した。

同じく枕業界に就職しようとしている学生同士だ。枕議論には熱が入る。

敏彦の熱意に当てられ、次第に俺もこのレンガに魅力を感じてきた。

「そんなに言うなら、試してみるか」

ちようど煮詰まっていたところだ。なにかの切っ掛けになるかもしれない。

そしてレンガに頭を載せた瞬間、目が覚める心地を味わった。

新感覚。いままで想像もしなかった、新しい枕の在り方だ。

「これは……すごい発見だな」

「ああ、そうだろう？」

敏彦は嬉しそうに頷き、勢いに乗ってレンガについて語り出した。

「これを企業に提出したら、間違いなく採用されると思うんだ」

敏彦は楽しそうに笑っていた。

朝が来た。結局、敏彦はウチで酔いつぶれて寝てしまった。

俺はひとり、部屋の中でレンガを見つめている。

暗い衝動が湧き上がっている。

このレンガは、停滞しつつある枕業界に一石を投じる可能性を秘めている。

これを企業に持っていけば、どうなるのか？

画期的な企画だ。間違いなく誰もが食いつく新案だろう。

俺の将来を心配している両親の顔が思い浮かぶ。

枕業界で働きたいという、その一念だけで俺は上京したんだ。

「悪いな、敏彦」

敏彦は大口を開けて眠っている。

こいつも枕業界への就職を目指して頑張って勉強している。

しかしそんなことは関係ない。仲良しこよしで幸せになれるほど、

人生は甘くないんだ。

わざわざライバルに情報を提供するとは馬鹿な奴だ。

俺はまだ面接を受けていない枕会社の住所を確認し、家を出る。

紙袋を抱えて、俺は電車に乗った。

3・湯川春子

今日は裕一の誕生日だ。付き合い始めてから初めての彼の誕生日。電車に揺られながら、自然と頬が緩んでしまう。

プレゼントは彼の大好きな枕だ。業界最大手のメーカーが出した新製品。ちゃんと紙袋にもそのメーカーのロゴが入っている。

電車の中は混雑している。なにしろラッシュアワーだ。仕方ない、我慢しよう。

それでも、さっきから私の肩に頭を載せて眠っている隣人については我慢できない。よほど眠いのか、起きる気配もなく私の肩で眠っている。

そうこうしているうちに、駅に着いた。忘れないように紙袋をしっかりと持つ。

私は隣人の頭を静かに振りほどき、ドアに流れていく人の群れに混じって電車を降りた。

「裕一、はい、プレゼント！」

紙袋から出てきたのは最新型の枕ではなく、なぜかレンガだった。私の満面の笑みはものの一秒で崩れてしまった。

意味がわからない。枕はどこにいったのだろう。

そして気付いた。紙袋のロゴが聞いたこともない会社のロゴにすりかわっていた。

どこかで紙袋を間違えたんだ……。

裕一の表情がみるみる凍っていった。

「は？ 何コレ？」

「え……」

「なに？ ふざけてんの？」

「ちが……、違うの！ 私、裕一のためにちゃんと新しい枕を買ってきたの！」

「枕……？　これが？」

裕一はにこりともせず私を睨みつけている。
嘘だ。

なんで枕じゃなくてレンガが出てくるのよ！

「わかったよ」

裕一が、静かに立ち上がった。

「お前の気持ち、よくわかった」

「待って！」

「じゃあな、春子」

裕一は立ち止まることなく、足早にカフェを出て行ってしまった。

「なんで……？」

あまりにも唐突な出来事で、感情が追いつかない。

力なく椅子にもたれかかって、呆然とレンガを見る。

ふと、紙袋から数枚の紙が覗いているのに気付いた。

どうしたらいいのかわからないまま、私はその紙に目を落とした。

『画期的な新企画。レンガという名の新たな枕！』

ふざけてるのか。

紙には、レンガを枕として売り出すための様々な文句が見栄え良

く記されていた。

なにが枕よ。ただのレンガじゃない。

不意に涙が溢れ出す。

あまりにも理不尽な破局。

なんでこんなレンガなんかに、私の恋を邪魔されなくちゃなら
ないのよ！

裕一のことを好きだった。

こんなに本気で誰かを好きになれたことなんてなかった。

裕一に喜んでもらおうと、色々な枕から吟味して、友達に相談し
て、ようやく選んだ枕だったのに。

涙が止まらない。嗚咽がもれてしまう。

私は唐突に終わった恋を想い、ひたすら泣き続けた。

4・茂木由蔵

若い女性が足早に去っていく。

事情はなんとなく察することができる。私は彼等の一部始終を見ていた。

私は彼女の座っていたテーブルに近寄り、残された紙袋を手に取り、

紙袋には我が社のロゴマークが刻まれていた。経営が傾き、余命いくばくもない小さな枕会社だ。

おそらくどこかで間違えて持ってきてしまったのだろう。これのせいで、彼女らは破局したのだ。

「枕がどうか言っていたな」

私はほとんど客のいないカフェを見回し、自分の行いが窃盗として見られないかを確認した。幸いなことに、誰も私の姿に気付いていなかった。

息子と同じくらいの年齢だったな。席に戻りながら、思い返す。

喧嘩別れ気味に息子が家を飛び出してからもう三年が経った。今頃どうしているのだろうか。

いや、感傷はやめよう。

私は紙袋の中身を覗いた。

「これが枕？」

さすがの私も目を疑った。工作上、様々な枕を扱ってはきたが、まさかレンガを枕として扱うことなんて考えもしなかった。

「どういうことだ？」

そのまま紙袋に入っていた企画書に目を通す。

なかなか悪くないアイデアだ。うまくことが運べば、飽和状態にある枕市場に新たな風を起こすことができるだろう。

ひょっとしたら倒産寸前の我が社を救える力を持っているかもしれない。

しかし、こんな奇抜な企画は採用できない。

「こんな前例のない枕、通るわけがないだろう」

家出した息子が考えそうな企画だ。

息子は高校生の頃から、奇抜な枕ばかりを考案してきた。枕会社の社長である私に、商品化してくれないかと何度もしつこく持ちかけてきていた。

私はそのすべてを却下してきた。息子とは枕に対する方針を一度として共有することができなかった。

このレンガ。実にあいづらい企画だ。

考えていくうちに、そうとしか思えなくなった。

懐かしさすら覚える奇抜な枕。

たとえば、息子が家出をせずに会社を継いでいて、私が息子の奇抜さを認めていたとしたら……。

私はレンガを後頭部に当ててみた。冷たくて堅い。しかし新鮮な感触だ。

目を閉じ、想像する。この枕を使ってくれる人の姿を考える。

「……いいじゃないか」

ふと、久しぶりに息子の声が聞きたくなった。

そうだ。今夜にでも電話してみよう。

あいつの考える枕について、じっくりと腹を割って聞いてみようじゃないか。

後日談

もうとつくに日が落ちている。酔いつぶれて丸一日寝過ごしたことになる。

目が覚めるとすぐに、ケンがレンガを勝手に持ち出したことに気付いた。

理由はわかる。昨晚のあいつは疲れた顔をしていた。就職活動が

うまくいっていないことは痛いほど伝わってきた。

ぼくは諦めまじりで、ケンの部屋を後にした。あのレンガが枕として世に出るなら、それが自分の手柄じゃなくてもいいじゃないかと言い聞かせる。

諦めきれるとは言えない。それでも諦めようと思うことはできる。

その時、電話が鳴った。見知らぬ番号だ。

「もしもし？」

「……敏彦か？」

「父さん？」

突然だった。

三年前、ほとんど喧嘩当然に別れたはずの父さんが、なんでいまさら……。

「実はな、敏彦。お前に聞いてもらいたい枕の企画があるんだが」

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6265d/>

まくらぶ

2010年10月8日15時27分発行